

## 論文審査の結果の要旨

氏名： 石 村 淳

博士の専攻分野の名称：博士（薬学）

論文題名：病院薬剤師による 2 型糖尿病通院患者の診察前面談の有用性に関する研究

審査委員：(主 査) 教授 亀 井 美 和 子

(副 査) 教授 岸 川 幸 生

教授 福 岡 憲 泰

本論文は、2 型糖尿病患者の臨床及び人的アウトカムの向上を図るための病院薬剤師の効果的な関わり方を検討するために、医師の診察前に薬剤師が面談を行い、患者が抱える問題点を抽出したうえで個別最適化のための薬物療法プロトコルを用いた処方提案を行うことの有用性を評価したものである。本論文は 3 つの章で構成され、第 1 章では 2 型糖尿病通院患者の薬物治療の心理状況及び治療満足度の把握、第 2 章では薬剤師の診察前面談の試行的運用、第 3 章では面談で把握した問題点を解決するための薬剤選択プロトコルの作成・実施、および、その治療効果等の評価が行われた。

第 1 章では、糖尿病内科の外来を受診した 2 型糖尿病患者に対して自己記入式アンケート調査を実施し、薬物治療に対する考え、治療満足度、薬剤師に求めること、薬剤師との面談の希望を把握した。同意取得者 300 名のうち、有効回答者 286 名の回答を分析した結果、そう思うと回答した者の割合は、「薬を正しく服用できている」が 91.6%、「薬の効き目を理解できている」が 86.4%、「薬を変えてみたい」が 13.6%、「薬に対して不安がある」が 17.1%であった。薬剤師との面談を希望する者は 55.2%を占め、面談希望者は、「薬を変えてみたい」と「薬に対して不安がある」でそう思うと回答した者の割合が高く、治療満足度も面談を希望しない者と比べてスコアが有意に低いことが示された。また、薬剤師に求めることの上位には、「副作用・相互作用の確認」と「医師への処方提案」が挙げられた。薬剤師との面談を希望する者は、希望しない者と比べて、面談の機会を通じて現在の薬物治療を改善させたいと考えていることが推察された。

第 2 章では、薬剤師との診察前面談を試行的に運用し、個々の患者に合わせた薬物療法の提案を行った。2 型糖尿病通院患者を対象とした薬剤師外来は、週 1 日開設し、2 名の薬剤師が担当した。担当薬剤師は面談時に、個々の患者の病状や生活習慣を把握した上で最適な薬物選択、用法・用量を再検討し、必要に応じて処方提案を行った。面談を行った 20 名の患者うち、薬物療法の見直しが必要とされた患者は 17 名であった。薬剤師による医師への処方提案が行われ、その後、HbA1c が 5 ヶ月間で 9.4%から 7.3%へ減少した症例が認められた。運用した診察前面談が、患者の服薬アドヒアランスと治療効果を向上させる可能性があると考えられたが、処方提案の内容は様々であったため、第 3 章では、薬剤選択の標準化を図るためのプロトコルを作成し、その治療効果等を評価した。

プロトコルは、患者の服薬アドヒアランスの状況と薬剤の作用に基づいて、医師と薬剤師が事前に協議したうえで作成した。プロトコルを適用する患者は、薬物治療中の 2 型糖尿病のうち、6 ヶ月以上継続して HbA1c が 7.5%以上であり、医師から説明を受けて薬剤師外来に同意を得た者とした。3 ヶ月毎に面談を実施し、服薬アドヒアランス、生活習慣・副作用状況、採血結果等を確認し、薬物療法の見直しを行った。プロトコルの対象者は 31 名であり、開始時に合剤や週 1 回製剤への変更を提案した者は 22 名、ビッグアナイド薬を追加又は増量を提案した者は 2 名、その他の薬剤の追加又は増量を提案した者は 7 名であり、提案どおりに変更が行われた。その後さらに変更が行われた者は 3 名であった。使用薬の種類数は、開始時 3.4 ± 1.0 から 6 ヶ月後 2.8 ± 1.0 に有意に減少した。HbA1c は、開始時 8.6 ± 1.2 から 6 ヶ月後 7.3 ± 0.7 に有意に減少した。また、6 ヶ月後の患者満足度は高く、面談の利点として「自分にあった薬剤を薬剤師の観点からも選んでもらえた」を選択した者は 31 名中 30 名であった。これらの結果より、個々の患者にあわせた薬剤選択には薬剤師が積極的に関与していくことは、治療アウトカムだけでなく、人的アウトカムにおいても望ましいと考えられた。本論文において 2 型糖尿病通院患者の診察前面談の有用性が示されたことで、病院薬剤師が主体的かつ効果的に 2 型糖尿病患者に関わる方策を示すことができたと考えられる。

よって本論文は、博士（薬学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

平成 31 年 1 月 17 日